

第 23 回 TFD セミナー

日時：2019 年 3 月 5 日（火）19：15～22：00

場所：フクラシア東京ステーション 6 階 B 会場

開催の言葉を代表世話人の衣笠えり子先生にいただき、3 月 5 日に第 23 回 TFD セミナーをフクラシア東京ステーションで 24 名の先生方にご参加いただき開催しました。今回の当番世話人は、東京医科大学八王子医療センターの吉川憲子先生と順天堂大学越谷病院の濱田千江子でした。セミナーは一般演題 1 演題と特別講演の構成でした。

一般演題は、「IgA 腎症に溶連菌感染後急性糸球体腎炎が合併した際の蛍光抗体所見」を東京医科大学八王子医療センター腎臓病センターの小島亜希先生が発表されました。

症例は、10 年来の血尿と蛋白尿を呈し IgA 腎症を疑われた症例で、溶連菌感染後急性腎炎発症時に腎生検を実施し、「溶連菌感染後急性腎炎の病理所見に加え光顕では IgA 腎症に合致したメサンギウムの増生とマトリックスの増加、電顕でメサンギウム領域での沈着物を認めましたが、蛍光抗体では C3 は陽性でしたが IgA の沈着は認められなかった。」との報告でした。急性腎炎治癒後も尿所見継続したため IgA 腎症に対して扁桃摘を行い、尿所見の改善を見ているとのことで大変興味深い症例でした。過去にも同様の症例が 5 例報告されており、メサンギウムの透過性が亢進による IgA の沈着の wash out や、補体が活性化による免疫複合体の分解などが機序として考察されていました。

特別講演は、埼玉医科大学腎臓内科教授 岡田浩一先生に「糖尿病性腎症から糖尿病性腎臓病へ：新たなアプローチ」のご講演をいただきました。従来一律にとらえられていた糖尿病性腎症はヘテロな表現型を有する病態であり、糸球体病変が首座の症例や皮質の虚血が首座の症例があり、この病変部位の相違により臨床像がネフローゼ症候群や比較的尿たんぱくが少なく腎機能が保たれる一見腎硬化症のような経過の症例もあるとのことでした。

非侵襲的鑑別診断法として、BOLD MRI を使った腎血流評価が有効であり、現在臨床使用に向け準備中とのことでした。さらに、病型を考慮した治療選択の必要をお話いただき、これまでの糖尿病性腎症にはRAS系阻害薬の併用ではなく、血流の低下した症例では投与を中止・減量することが望ましく、また集学的な治療としてDPP4阻害薬やSGLT-2阻害薬の腎臓への効果、さらに現在治験が進行中のBardoxolone methylの腎機能改善効果への期待に関してもご講演いただきました。質疑応答では、明日の診療に役立つテーマ有意義なテーマに対して多数の参加者から質問があり、盛況のなか講演を終了しました。

講演後、岡田先生、小島先生をはじめ参加の先生方との懇親会が会場に隣接した部屋で開催されました。皆さん交流を深め時を忘れて楽しい時間を過ごし、22時の開場お開きの時刻を迎えました。次回は2020年3月3日（火）に、渋谷 祐子先生（NTT東日本関東病院）と平松 里佳子先生（虎の門病院）の両先生が担当世話人で開催いたします。

文責：濱田、吉川